

もど子と人婦

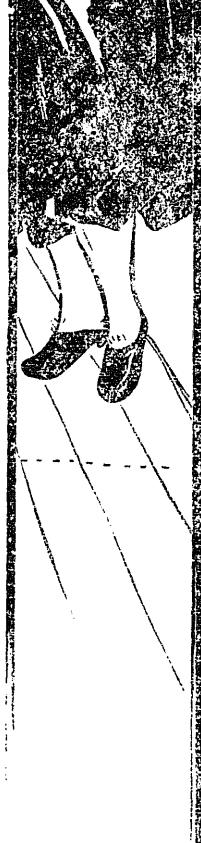
號貳 第卷 第四

鼴鼠の起源

やまととの翁

いつの頃でしたか、まづ、ある處に、慾張りの金持老爺さんと正直物の貧乏老爺さんとがありましたとさ。

さて、此二人の老爺さんたちは



一所の畑をお仲間にして、持つて居りましたが、或時のこと、一度同じ時刻に、二人とも、同じ種を持って行つて、此畑に播きました。

所が、神様は、正直老爺さんを惠んで下さいますから、この老爺さんの播いた種は、ずんく芽を出させて呉れましたが、慾張老爺さんの播いた種は、一向に芽を出して来ませんでした。

そこである日の朝、二人揃つて畑へやつて参りました所で、慾張老爺さんは、「今芽を出して居るのが、自分の播いた種だ、この所は、己の地面なんだもの」といひ出しましたので、正直老爺さんは、吃驚して、「いーや、そんなことはない筈だ、それは私の播いたのに違はありません」といつて争つて見ましたが、

慾張老爺さんは中々承知しません、そして、隨分無理じやありますんか、次の様にいふのです。

「ど一も、然しこう二人で、争つて見ても、つまりは水掛け論で切りもない話しじや、で、お前さん、己の言ふことを信じてくれないのなら、まあ仕方がないから、明日の朝早く、夜の明けぬ前に、二人でこゝに来て見よう、すると、神様が此喧嘩の裁判をして下さるに違ないから、」

そ一言はれたもんですから、正直老翁さん、仕方なしに、家に歸つて行きますと、慾張老爺さん、一人そこに残つて居つて、夜中かゝつて、其畠へ深い穴を一つ堀りまして、さて、家に歸つて行つて、自分の息子を連れて来て申しますには、「お前は、

今から、此穴の中に這入つて居て、明日の朝、己が來て、此種は誰が播いたのかといつて問ふたらお前は、此穴の中から『そりや金持老爺さんのだ、貧乏老爺さんのじやない』と言つて答へるのだよ』

と言ひ付けまして、上から藁などを一杯冠せかけて 分らない様にして歸つて行きました。さて、翌朝になりますと、二人の老爺さんを始め近所隣りの人さへ、澤山に其畠へやつて参りました。すると、金持の慾張り老爺さんは、大勢の中から出て来て、天にも聞ゆる様な大聲を上げて申します。

「神様！ どーかお告げを願ひます、これは私が播いた種でしょーか、夫とも此貧乏老爺さんの播いたのでしょーか。」

も

ど

子



大勢の人は、ふだんから、慾張老爺さんのこと、正直老爺さんのこと、よくして居まして、こんどの事も、どうせ、慾張老爺さんが可けないのだらう、だから、あんなに大聲で祈つたとて、神様は屹度、正直老爺さんのだといつて下さるに違ないと口には出しませんでも、十人が十人まで、皆全じ様に思つて居りますと、意外にも地面の中から聲が聞江て

「そりや金持老爺さんのだ、金持老爺さんのだ」と言ひましたから、正直老爺さん始め、集まつて來た大勢の人も皆吃驚してどうした事かとあきれて居りますと、今度は天の方からまことに清らかないゝ聲がして

「今の言葉は聞くには及ほん、播いた種は、正直者の貧乏老爺」

さんのに違ひない」
と言つて、夫から、一々く
って聞かせられましたので、大勢の人は、あつと言つて、今更
慾張老爺さんの惡計に驚いて居ります。

そこで、神様は、又、穴の中の息子に向はれまして、

「汝は親の惡事を助けるとは、不届な奴じや、其罰として、太
陽の空に輝く間は其穴の中を出ること罷りならん」と言ひ渡さ
れました。

すると、其息子は、其儘其處で、鼴鼠になつて仕舞ひました。
鼴鼠が、畫太陽の光を恐れて、地の中へくと逃げて回はるの
は右の譯からだといふ事です。

めでたしく。